

有島武郎研究

—『或る女』の成立をめぐって(三)—

宮野光男

本稿は、梅光女学院大学国語国文学会の『国文学研究』第四、五号に発表した「有島武郎研究——『或る女』の成立をめぐって(一)、(二)——」〔以下(一)、(二)と称する〕に続くものであり、広島大学文学部国語国文学会近代文学研究会の『文学研究試論』第九号の「有島武郎研究——『三部曲』のうち未定稿および定稿「サムソンとデリラ」・「大」洪水の前」と、『或る女のグリーンプス』との関係を中心に——〔昭和四十五年十一月発行予定〕とも関連するものである。そして本来ならば本稿は、かねて、懸案であった田鶴子から葉子への書き変えの実態の分析をなすべきところであるが、もう一度遠まわりにはなるが、その分析のためのいわば補助線としての役割を果たすことができるように思われる poetic woman について、それを存在あらしめている、実質的な一つの生の論理を追究してみようと思うのである。具体的には『三部曲』のうちの第三番の作品「聖餐」に描かれているマグダラのマリヤについて、それが有島の poetic woman であるか否か、あるいはその人間像の特色について

有島武郎研究 —『或る女』の成立をめぐって(三)—

分析することによって論をすゝめてゆくことになる。そのためには一、作品における人物設定の分析

二、有島の創作意図の分析

の二点に絞って考察しようと思うが、有島の聖書理解〔キリスト像〕の特色をより明確にするために、同じ素材と問題を扱っているとされる椎名麟三の作品「マグダラのマリヤ」〔昭29・2、テキストは講談社版椎名麟三作品集第三巻所載を用いた。引用の下の数字は同書の頁数を、上・下は上段下段の区別をあらわしている〕との比較を試みた。

二

まず「聖餐」において、有島が「中心点」を置いているマグダラのマリヤの人物設定の分析からすゝめてみよう。

登場人物の説明に、

マグダラのマリヤ——マルタの妹

とされていることに、まず注目したい。聖書では、マルタの妹はベタニヤのマリヤと呼ばれている女性であつて、マグダラのマリヤとは明らかに別人である。これは、すでに(二)において述べたところであるが、有島が「聖餐」においても、聖書の中の全く別の何人かの女性を、あえて一人の人物像に統一しようとしていることを考えているものであることを表わしているのである。以下、簡単に、その事実を明らかにしてみよう。「なお具体的な場面や事件と聖書との関係については煩をさけるために省略する。」

エルサレムの神殿の前の広場において展開する「姦淫の女」の場面への導入部において、「美しき寝衣を纏ひて髪振り亂したるマグダラのマリヤ」が、ローマの兵卒、パリサイ人たちに捕えられ、神殿に裁かれるために連行されてきたのを眺めていた群衆の一人「丙」は、彼女を、

此の頃は此の都によくある事だが姦淫を犯してゐる所を見つけたのだらうだ。〔第一幕〕

と、説明している。しかも、このマグダラのマリヤは、イスカリオテのユダによつて、

あの女なら私が知つてゐる。あれはマグダラにゐる時から生れ付いたやうな妓女だつたのだ。〔ク〕

と、その素性が発かれていますのである。妓女、それは、聖書でいうところの「罪の女」である。

第一幕のクライマックス、「姦淫の女」の裁きの場面。これは(一)で指摘した有島の日記〔明34・2・8〕の内容に対応する場面であり、その後半の部分である。Egoと名づけられた姦淫の女とイエスとの決定的な出合の場面の再現であるということができよう。

第二幕「ベタニヤのラザロの家」は、いわゆる「ラザロの復活」が中心である。マルタ、マリヤの兄ラザロが、イエスによつて復活するという聖書の記事が根拠になっているところであるが、ベタニヤのマリヤとしての行為が、ここから前面におし出されてくるところでもある。それは三幕「シモンの家」の前半、いわゆる「葬りの用意」の場面にひきつがれている。

〔マルタ、他の女達と共に食物を運び来る。〕この時マリヤ美しき石の瓶を盆の上に載せて恭しく持ち來り、イエスの足許に坐し、その瓶の口を破り、ナルドの油もてその脚を^{うるは}沾し、潤澤なる己が髪の毛にてこれを拭ひ始む。〔第三幕〕

ここに引用したのは卜書の一部分であるが、以下に展開する「聖餐」のクライマックスともいへべき「葬りの用意」の場面は、(二)で指摘した、日記〔明34・11・24〕と、全く一致するところである。

エピグラフに、マタイによる福音書の一節「——われ誠に爾等に告げん。天の下いづくにても此福音の宣傳へらるゝ處には、此婦の

なし、事もその記念の爲めに宣傳へらるべし。」〔二十六章十三節〕がひかれていることからも明らかであるように、有島の人物設定上のポイントが、ベタニヤのマリアに絞られているが、

「聖餐」に於ては、私は聖書の解釋に或る新しい考へ方を試みようとした。それは誰にも意外であつたキリストの突然の捕縛と死刑とが、一人の女子に豫めキリスト自身に由つて告げ知らされてゐるに違ひないといふ事實である。「〔「聖餐」に就いて〕」

という有島の説明にもあるように、キリストの「只一人の理解者」〔同前〕であるマリアとして描こうとしているところは、

シモン！イエス様が……イエス様のお命が……〔中略〕そのお命が危いのです。今夜です。今です。お、私は、何もかも云つてしまつた。〔三章〕

というドラマにおけるマリアの、このことばに形象されており、日記の記述のなかにみられる特色の具体化されたものであるということができよう。しかも、それが、

彼女が poetic woman なりしが故に、彼女の鋭敏なる感情と基督を敬慕する affection とは、よく基督が自ら知り給ひし如く基督の死を豫察せしにあらざるか。〔日記、明 34・11・24〕

というところの劇化であることを知るときに人物設定における有島の意図が、全くこの poetic woman におかれていたであらうことを指摘することができるのである。

以上の考察によつて「聖餐」の主人公マゲダラのマリアが、人物設定において、(一)において明らかにした有島の poetic woman の属性としての、姦淫の女、ベタニヤのマリア、罪の女、マゲダラのマリアのイメージを総合的に付与された存在であるということができよう。しかも、かなり忠実に、明治三十四年当時の聖書理解にもとづいた劇化がなされており、人物設定における外面的条件は、明らかにマゲダラのマリアが poetic woman であることを表わしているのである。

三

poetic woman の外面的条件を具備したマゲダラのマリアに、有島がいかなる期待をかけていたかを、「聖餐」の創作意図の解明という観点から考察してみよう。

有島が、「聖餐」を基本的に意図したのは、

大膽なことかも知れないが、無謀なことかも知れないが、基督を舞臺に持出して見たいと思つてゐる。〔足助素一宛書簡、大 5・3・22〕

からも明らかなように、未定稿「洪水の前」を発表した直後であった。このことは、すでに、その時期に「三部曲」の基本的な構想が有島のうちに胚胎していたことを物語っている。もちろん、それは、「自分の心の休まる丈けのものを書きたい」「同前」という気持ちに重点がおかれたものであり、聖書に取材した三つの作品を、一つの「ある関係を有たせようと試み」(吹田順助宛書簡、大9・1・19)たのは、「或る女」完成後のことであろう。

ところで、有島はこの「聖餐」で何を表わそうとしたのであろう。三つの作品の「ある関係」とは、前出の吹田順助宛の書簡によれば、

一、エホバ愛より「父なる神」への推移。

二、両性間の憧憬、争鬭、調和。

三、生命の向上、生命の向下、及生命の自足。

であるということであるが、後に発表された「聖餐」に就いて「大10・2、読売新聞所載」に、とくにそのうちでも「聖餐」という作品についての創作意図が発展的に委細に述べられており、それによると、「聖餐」は、

私の三部曲の最後のものであつて、この三つの戯曲の間には、私としては或る觀念上の連絡を與へてあるつもりである。「大洪水の前」で、エホバと人々に対する或る調和する事の出来ない心の苦しみが、「サムソンとデリラ」に於ては一種の、然し不満足な解決が與へられ、第三の「聖餐」に於てそれが圓滿の解決に持ち

來されてゐるといふのが構想の一つ。又、第一の戯曲に於ける男女關係が、第二のそれに於て激しい破綻を起し、第三に於て或る正しい調和を得たといふことを云ひ表わしたかつたのだ。「傍点筆者」

というように、神との關係の回復と、男と女との關係における交りの回復が、表裏一体をなしたかたちにおいて可能であることを実証しようとしたものだといふのである。有島はその状況を調和ということばで表現しているのである。調和の世界。それは「三部曲」のうちの前二作の登場人物たちが希望していた世界でもあろう。つまり、それは、有島の理想とする愛の論理が実現する世界なのである。有島は、その調和を、「聖餐」のなかで、*poetic woman*であるマгдаラのマリヤによつて描き出そうといふのである。

私は中心點を寧ろマリヤに置いて書いて見た積りでした。基督を精細に描く事によつてマリヤを浮き出させようと試みたのです。
〔吹田順助宛書簡、前出〕

この文面からも察せられるように、本来ならば、他の二つの作品に一幕ずつ書き足して体裁を整えたように、「聖餐」も、「もう一幕加へ、マリヤを表面に置いて其生活を明らかにし同時に其幕にユダを點出してユダの心持も同時に表現しなければならなかつたものだ」「同前」といふ、その構成上の不足な点があつたとしても、この戯曲が、あくまでもマリヤを中心としたものであり、有島が、マリ

ヤによって、「稀有な(ハ、)女性の美しい代表者を讚美しようとした」(「『聖餐』に就いて」)という創作意図を理解することができよう。

ところで、有島が、マグダラのマリヤによって描き出そうとした調和とは、具体的にはどのようなものなのであろう。以下、有島の描く調和の具体相を、poetic woman の内面性を明らかにしつゝ、解明してみようと思うのである。

四

有島のマグダラのマリヤという女性像の特色を、より明確にするために、同じ素材を扱っている椎名麟三の作品『マグダラのマリヤ』の人物設定との比較を試みてみたいと思う。

まず作品の人物設定について略記しておこう。『マグダラのマリヤ』は二章からなる短篇小説である。主人公はいうまでもなく、マグダラのマリヤであるが、第一章に描かれている彼女は、その素性を娼婦として描かれた「罪の女」であることを自覚した存在である。しかも、「悪鬼」がとりついている女であるという噂されている女であるということは、彼女が、七つの悪霊にとりつかれていた聖書のマグダラのマリヤの面影をも与えられた存在であることを示している。このマリヤが、パリサイ人たちに捕えられ、イエスの前に引き出され裁きを受けるというところは、いわゆる姦淫の女としての存在であることを意味しているのである。

第二章はイエスとの出合を経験したマグダラのマリヤの、いわば

後日譚である。更生したマリヤが、織物工場の女工として働きつゝ、乏しい給料をさいてナルドの香油を買い、壺に貯め、それをもつてベタニヤに滞在中のイエスを訪ね、思いがけずイエスの葬りの準備をしようとする女性を描かれているのである。つまり、これは明らかにベタニヤのマリヤが描かれているところである。有島と同様に、人物設定において、椎名もまたマグダラのマリヤという一人の女性像の中に、姦淫の女、罪の女、ベタニヤのマリヤを完全に同一人化して、一人の新しい女性像として形象化していることができるのである。

たんに、人物設定上の共通点だけでなく、前半の部分が姦淫の女の話が中心となっており、後半の部分がベタニヤのマリヤの葬りの準備の話でまとめられているというプロットまで、まことによく似ているということができよう。しかし、細部にわたって比較をした場合、とくに、内面的な問題にまで立ち入って考えた場合、共通点もあるが、また微妙な差のあることも認めざるをえないのである。

「聖餐」の前半の部分は、捕えられたマグダラのマリヤが、パリサイ人たちに利用されるためにイエスの前に引き出されてくるまで、もつぱらユダの策略と、イエスの愛の行為が具体的に描かれていて、その中心がマリヤ以外のところに置かれているような印象が強い。もちろん有島が、いわば裏切りの系譜に属する典型的な存在としてのユダに対して、聖書の枠を越えた解釈を与えた存在としてとり扱っていることは、マリヤとの対比において、マリヤのイエスに対する理解の深さをより鮮明にするための、計算された

存在として位置づけられているところであろう。

さて、有島の前半の部分の描き方に対して、椎名の方法は全く対称的である。彼はあくまでもマリヤを中心に描いているのである。マリヤの娼婦としての生活のさま、捕えられるときのさま、イエスの前に引き出されてゆくさまが、時の経過とともに具体的に展開されている。それと同時に、マリヤの内面の問題——疎外状況が、克明に描かれているのである。それは、あたかも有島が日記の中に描いてみせた Ego と名づけられた姦淫の女の心の動きの分析と同じものであるということができるのである。

椎名の描くマリヤは、

ローマの兵隊と来たら、わたしをぼろぎれのように振りまわした。そしてぼろぎれのように云つておこりながら、その通りにすると、人間のようでないと言つて、ぶつた。〔136上〕

という表現からも明らかのように、所詮は非人間化された存在であり、まさに「倉庫のなかにおいてあつた品物」〔138下〕のようなのだったのである。彼女が「自分のような女には、石で打たれて死ぬのが避け難い運命なのであり、その運命に対しては、誰も抵抗する手段がない」〔139下〜140上〕という絶望感に陥り、非人間化された状況のなかで「死」を思い続けていたのも、実は、彼女が愛の欠落を実感していたからにはかならない。椎名はその間の事情をつぎのように描いている。

わたしは一度も隣人を憎んだことはない。だが隣人は私を憎むのだ。いくら私が愛そうとしてもわたしを憎むのだ。そして相手が私の愛を受けつけない以上、隣人のためにどんなことがしてやれるだろう。全く私は隣人のために、水一杯汲んでやろうとして、彼等の方で汲ませてはくれないではないか。隣人を愛せよと云つたつて、隣人の方で愛させてくれないのだ。〔139下〕

これは、「我が愛は成就せられず。我が心は痛ましく悲しき大なる空虚を得ぬ。」〔日記、明34・2・8〕という、有島の描く姦淫の女 Ego の苦しみと等質のものであるということができよう。

ところで、有島が「聖餐」において描いているマリヤも、第二章で、人物設定上、日記の Ego と同じものであると指摘したが、内面性においても、椎名と同じような、イエスに出合うべき必然性をもった存在であることが二幕以下において彼女の懐想のあたりでつぎのように描かれているのである。

私はどうして人を呪つて生きねばならぬやうな女になつてゐたのでせう。人をいやしみ、人からはいやしめられ、それを自分の誇りでもあるやうに思つて、イエス様の大事なお弟子まで纏わなにかけては墮落させ、それで自分の力が確められたやうに思つて暮してゐた去年までの事を思ふと、まるで恐ろしい夢のやうです。私は肉を裂かれても骨を摧くだかれてもまだ罪から淨められたとは思へません。私の姿に迷つた人達は今でも……この今でも何處かで怒

つたり、悲しんだり、苦しんだりしてゐるのです……〔第二幕〕

「或る女のグリンプス」の田鶴子の男性遍歴とその懺悔を聞く趣きのある、このマリヤの荒んだ生活への反省も、もとはといえば「貧乏故に——大事な最初の戀が裏切られた」〔第二幕〕からだといわれているように、愛を求めつゝ、裏切られ、人間に絶望せざるをえなかったことに原因があるというのである。

この乞食のやうな負しい人達や、片輪者や、氣違ひや、あの獨りよがりの神の子の所にまで私を連れ出して、この上何の恥をかゝさうとなさるのです。恥！辱かしめを知らない間こそ恥はある。辱かしめを知つた者には恥はない。出来るならどんな恥でもかゝして見せるがいい。……晝の光にも私は怖れてはゐまい。太陽の光よ、さあ私を御覽。私はお前よりも美しいんだよ。……さあそこによろ／＼と集まつた人間の屑、私を辱かしめられるなら辱かしめて見るがいい。〔第一幕〕

恥を恥ともせぬ女、闇に属し昼の光を怖れぬ女、太陽の光よりも美しいと、自らの美貌を誇る女、傲慢な、尊大な、自意識過剰の、心たけき女。マリヤをかくも頑にとぎし、自暴自棄的にしてしまつたもの、それは人生の無意味であり、不安であり孤独であるといふことができよう。彼女の心は、いま、空虚な寂寥感に満たされているのである。にもかかわらず、あるいは、そうであるがゆえに、彼

有島武郎研究 —「或る女」の成立をめぐる(三)—

女は、彼女の内面の空虚さをごまかすために、自己防禦をしているのである。これは一種の居なりの論理ということもできるものでもある。

五

以上の比較によつて、有島も椎名も、ともにイエスとの出合の必然性をその内部に持った存在としてのマグダラのマリヤを描いていることを知ることができた。つぎには、イエスとの出合によつて彼女らの内部にどのような変化が生じたかを考察しなければならぬのである。

まず、有島のマグダラのマリヤの変化からみてゆこう。

イエスとの出合を経験したマリヤは、それまでの娼婦としての生活を改めて、シモン、マルタ夫婦やラザロとともに、ベタニヤ村に住むようになっていたのであるが、彼女におこつた大きな変化は——第二幕以下のマリヤの特色ということにもなるのだが、人間存在が、我他人ともに「淋しい」「孤独」なものであることを知り、しかも、それを安心して表白できる者となつたことである。それは先に引用した、イエスの面前での悪態とは全く対照的な人間理解であるということができよう。ちなみに、二・三の例をあげてみよう。

マリヤ—兄さん神様の懐ろで美しくお眠りなさい。おゝ悪寒がし出して来た。……本当に今日は淋しい日だこと。

マルターシモンはもう行つて下すつて。
マリヤ—え、今。姉さん私はどうしても淋しくつて仕方がありません。

ラザロの死を悼むマルタ、マリヤ姉妹の会話である。これだけでは、只ラザロの死を聞いて、すぐにかけてくれないうエスへの恨みごとのようにも聞えるが、にも拘らず、イエスに愛されていることを喜び、感謝しているマリヤの美しい自己放下の姿を見出すことができる。

感謝しても、足りない嬉しさです、本当に。この體は汚れ果てゝるますけれども……心だけは少しづつ、光の方に向いて行きます。私にはそれがよく分ります。私は私と同様に汚れた人達をみんな抱きしめて上げたくありません。……さうしてその人達も一緒に泣けるだけ泣きたい……その人達は本當に誰か泣いてくれる人の胸にすがり付いて思ふまゝ泣きたいのですものね。けれども世の中の人はさうだとは思つてゐないんです。だから眼にたまりかゝる涙を無理にも押し拭つて……この世の中は本當に、姉さん、淋しい所ですのね。〔第二幕〕

イエスに一切を委ね、イエスの中に生命の根柢を見出しうる生活を始めた自分の心をマリヤは「感じ易くなつ」〔第二幕〕た心という。それはまた、「痛み悲しむ心」〔第三幕〕でもあろう。彼女はその心で、イエスもまた孤独なる存在であることを見ることが

できるのである。ユダのイエスに対する誤解を知つたマリヤの、

神の國に生れるものは罪人だけです。……私にはあなたのお心持が悲しまれます。……イエス様はただ獨りでいらつしやる……。

お、淋しいそのお姿！〔第二幕〕

というつぶやきは、ユダにはどうてい理解することのできない愛の世界のことばでもある。このマグダラのマリヤの中に、有島のいう「基督が痛く愛し給ひし」女性、「鋭敏なる感情と〔基督を敬慕する〕affection」をもつた女性である *poetic woman* の姿を見出すことができるのである。このような淋しさを淋しさとして認めることのできる世界こそ、有島の求めている調和の世界であろう。それは、人間の否定的な状況を、それが決定的な否定であるにもかかわらず、ごまかさずに安心して表白できる世界なのである。そして、これこそ、マグダラのマリヤによつて明らかにされた新しい愛の論理であることができるのである。

人間が孤独なる存在であるにもかかわらずたえずイエスの愛によつて生かされている者であるがゆえに、かえつてそれが他者への思いやり、あるいは、深い洞察となつてゆく姿をマリヤの中に見ることのできる有島の変化に対して、椎名の変化は、それが交わりの回復というかたちで形象化されているところに特色を見ることができ。つまり、椎名は、マリヤの「別の女になつていようように感じた」〔142〕事実を、——そのような彼女を支えているのは、「同

時に、いたるところにいる」〔145上〕イエスであり、彼女の生活のあらゆる場面において、「今から決して罪をおかしてはいけませんよ。」〔143上〕「わたしも、あなたを罰しません。」〔143下〕「誰もあなたを罰しなかつたんですか？」〔144上〕と囁くひとりの男の姿と、そのことばである。椎名の描くこの男のイメージは、後に『美しい女』〔昭30・10〕における美しい女のイメージというかたちで形象化されている、復活のキリストの原型であると思われるが——それまでの生活では思いもよらなかつた挨拶ができるようになったことで象徴的に描いているのである。

彼女が、自分を見さえすれば唾をばく鞞皮の職人へ、お早うございます、と挨拶したとき、職人は、苦い汁でも飲まされたようになむずかしい顔をしながらも、お早うと挨拶をかえしたではないか。マリヤは、そのとき、この世界を変え、この自分を変えたものが誰であるか、しつかり見たのである〔144下〕

埴谷雄高氏は、ここに椎名が到達した「ユートピア」の日常的な愛の基本形を見ようとしているが、正鵠を得た論であるということができよう。愛の欠落の実感が、交りの断絶を思わせた原因だったのだから、その交りの回復の象徴としての挨拶は、まさに愛の生活化された姿としてとらえることができるものなのである。しかし、「彼が愛の一点だけでイエスと接触^{〔註4〕}していて、その他の面、殊に復活などの奇蹟の面では当惑している」という氏の考え方は、いささか疑問を感じるころである。もしそうであるならば、結局、本質

有島武郎研究 — 「或る女」の成立をめぐる一

的には有島と同じマリヤが描かれているのであって、たんに、表現の相違だけが問題になってしまふ恐れがあると思うのである。

椎名はマリヤの世界の変化を、

彼女は、その自分の眼から、うろこが落ちたのだ、という風に考えた。〔144上〕

ともいつている。「眼から、うろこが落ちる」ということは、ダマスコ途上においてパウロが経験した復活のイエスとの出合による回心をあらわす神話的表現^{〔註5〕}であるが、ここはそれと同じ経験が、マリヤにも起つたことをあらわしているのである。実は、マリヤの復活のイエスとの出合というこの一点において、椎名と有島とは決定的に異っていると思われるのである。

そしてイエスは、間もなく十字架上で死んだ。だが、三日目によりみがえるというイエスの言葉^{〔註6〕}を、弟子からもれ聞いて信じていた彼女は、イエスの母マリヤたちとともに、イエスの死んで三日目の夜、おろかにも、墓の前でそのイエスを待つていたのでつた。そして、どうもはなはだ残念なことであるが、イエスは、彼女の信じていた通り復活したのである。彼は、彼女たちの前にあらわれると、ここにこしなげら、彼女たちへ云つた。

「御機嫌よう！」〔147下〕

椎名流の表現「どうもはなはだ残念なことであるが」などに眩惑

される恐れもあるが、最後のイエスからの挨拶が、マリヤが復活のイエスにささえられた存在であることを、つまりマリヤの確かさの保証が、彼女の内部にあるのではなく、イエスの側にあることを表わしているのである。

もちろん、有島に復活のイエスを書く意志がなかったわけではない。むしろ、積極的に、彼なりの方法で書こうとしていたのである。

このマリヤのみがキリストの心を離れながら感じてゐて、キリストの死後、弟子達が絶望の余り一人残らずキリストを離れ去つた時にも、一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止めたと思はれるのだ。「『「聖餐」に就いて』」

ここで有島がマリヤの果たした役割について述べていることは、すでに述べたところであるが、「マغدダラのマリヤの強烈なる想像」が、「愛」が「世界に復活の神を与えたのである」とするルナンのキリスト理解の範囲を出ないものではある。しかし、たとえそれが正統的なキリスト理解ではないとしても、そこまで描かなければキリストに関わる愛の論理が完成しないことを彼は知っていたのである。が、「聖餐」では、ついにイエスの復活は描かれなかった。補訂の内容にも、それが積極的に意図されていなかったことは、本稿第三章においてふれた吹田あての書簡からも明らかなのである。もちろん、ここで有島の信仰の評価をするつもりは毛頭ないが、どのようになかたちにおいてでも、復活のイエスを描きえなかったということ

が、マリヤにおいて実現している調和が、人間としての最高の状況であると同時に人間としての限界をもったものである事を認めざるをえないということを描きなければならないのである。人間としての限界、それは、いうまでもなく死の認識である。孤独を孤独として受けとめるといふことは、本質において、死を死として、あるがまゝの姿で認めることなのである。有島は、マリヤの poetic woman としての内面性を、後述するようにイエスの死を予察することのできた者として描いているわけであるが、このところに、人間を極限まで追求した果てに明らかになる理想状況と限界状況との接点を見出すことができると思はれるのである。

六

poetic woman としての条件を、すべて兼備している女性マغدダラのマリヤの愛は、イエスをすべての者が誤解しているさ中において正しく理解していたことの証として彼の死を予察しうる存在として描かれているということから考えても、人間としての愛の最高のものであるということができよう。そして人間にとって、最も否定的な状況である死を、最も肯定的な人間関係をあらわす愛のうちに察知するという破格の論理が、調和という状況として認識されているところに、有島のいう調和の意味を理解することができるのである。もちろん、イエスの中に彼女の愛の根拠をみているマリヤは、確かさの根拠を、彼女の中にはなくイエスの中に見い出している点において、「三部曲」に描かれている他の人間たちとは異つ

た存在である。しかし、

今私も落着きます。少し待つて下さい。……世に勝つとはつきり仰しやつたイエス様が……私は何を信じたらいいのだらう……。けれども主は信じると仰しやつた。(この頃よりマリヤは他の兄妹等の凝視の中に全く孤独なるものゝ如くなり、宛ら荒野の真中に立てるが如く獨白す) 主よ、信じさせて下さいまし。あなたが限りなく生き給ふ事を信じさせて下さいまし。……静かに……静かに……もつと静かに……若し見る事が出来なければ……凡てが聞こえるやうに……おゝ世界が闇になつて行く……〔第二幕〕

というマリヤの眩に、ヤベテ、サムソン、デリラ、あるいはまた、姦淫の女、罪の女たちの「待望」していた愛の論理の実現を見い出すことができるであろうか。「信じさせて下さい。」ということとは、それにかける意味の強さと同時に、今はそうではないこととの不安の表白としてまことに印象的なことばなのである。

このように、マリヤが究極において愛の論理の破綻を実感していることの原因を考えるためには、有島の「人間イエスへの憧憬」を、ふたたび想起しなければならないだろう。椎名と有島との相違の決定的なポイントとして復活のイエスを描いているか否かをあげたのも、実は、この点に関わりがあるのである。「三部曲」論に即していえば、それがいかなるかたちにおいてでも、有島がついに復活のイエスを描きえなかつたということが、マリヤに、「生命の自己」を可能にする「調和」を与えることができなかつた点に表われ

ているのであって、「或る女」論に即していえば、人間の絶望を救う「生の論理」を、これまでのような人間理解の中には見出しえないのだという段階的な結論を見出したその記念碑として「聖餐」を位置づけることができるのではないかと思われるのである。有島は、

これが私の舊衣を脱する最後のものです。(「吹田順助宛書簡」、大 8・12・16)

と書き送った時、有島はすでに「聖餐」の世界が、過去のものとして葬り去られる運命にあることを、さらに新しい生の論理を求めて彷徨しなければならぬ者であることを自覚していたことも事実なのである。それが、poetic woman の鋭い洞察力によって察知しえた人間の、有島の運命なのである。

七

以上、「或る女のグリンプス」の田鶴子から「或る女」の葉子への変化の実態と、それを支えている論理を知るための、一つの傍証として「聖餐」のマグダラのマリヤの poetic woman 性とその特色とを考察した。マグダラのマリヤは、たしかに poetic woman であつた。それは、具体的に人間の淋しさを実感し、しかもそれに耐えることのできる根柢を人間の中に見出すことのできる存在として描かれていた。この点に関して葉子の生き方を検討すること

が、葉子像の分析の一つのポイントになるであろう。ところで、マグダラのマリヤの分析を通して、彼女の限界を、聖書の世界のことばを用いれば、復活のイエスとの出会を経験することのできないマリヤであることも判明してしまった。ふたたび、「お、世界が闇になつて行く」と人間の闇の予感にふるえるマリヤがその姿を象徴している。この事實は、有島の人間観に即していえば、人間に根拠をおくかぎり、その「調和」の論理にも限界があるという事實を認めざるをえないことを意味している。愛において確めた神との調和は、「人神」であること^(註8)によって否定されてしまうものなのである。と同時に、人との調和は、愛の中に死を見ることによって、自己内部における調和は、癒されることの喜びを失った淋しさに逆転してしまうこと^(註9)によって、もはや、生の論理ではありえないものとなってしまうのである。つまり、はからずも、この作品が、有島の人間観における一つの決定的な変化をよぎなくされている状況を描き出したものであるという事実を知ることができたように思われるのである。

註1・2 イスカリオテのシモンの子。聖書は、彼がイエスの一団の財務をつかさどっていたこと、イエスへの裏切りとその悲劇的な結末については述べているが、その裏切りの動機については全く明らかにしていない。一般的には「政治的野心をもってイエスの弟子になったが、これに失望し、ついに師を売った」(聖書辞典日本基督教団出版部 昭37)とされているが、これも一つの解釈であって、マグダラのマリヤについての解釈

同様、聖書を文学的に読んでいるか、あるいは宗教的にか、倫理的に読んでいるかを試してみる試金石になるところである

註3・4 講談社版権名麟三作品集第三巻解説

註5 ダマスコ途上において、復活のイエスに出会い、回心したパウロのこの状況を、聖書は「サウロ(パウロの前名)」の目から、うるこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった。そこで彼は立ってバプテスマを受け、また食事をとって元気をとりもどした。「使徒行伝第九章一八—一九節」と書いている。

註6・7 拙論有島武郎研究——キリスト論を中心に——梅光女学院短期大学国文学研究第二号 昭41

註8 有島は、自分の信仰を顧りみて、「ポルテールの云つた、「神人を作るにあらざ、人神を創れるなり」との警句はしつかりとお前の信仰の状態にあてはまるものだったのだ。」「『内部生活の現象』大3・7」といっている。この考えが、後に『リビングストーン傳』第四版序(大8・3)において明確にされた離教の条件の第一のものとして定着したのである。それは、『新舊芸術の交渉』(大11・8)において、ドストエフスキーの「神人と人神とを如何に調和すべきか」という問題への共感として語られてもいるわけで、有島の人間イエスへの憧憬の、もう一つの理論的裏付けともいうことができる。